

スイス精神医学の体験

人見一彦

スイス精神医学との出会いは、Schweizer Archiv のなかに、Scharfetter 教授と Benedetti 教授との共著論文「分裂病の自我障害についての身体に方向づけられた精神療法」を見出したことに始まる。分裂病の非言語的な精神療法的働き掛けに関心を抱いていたわたしは早速、Burghölzli の名称で親しまれているチューリッヒ大学附属精神病院の研究部門で精神病理学を担当している Scharfetter 教授に直接手紙を出した。まもなく Burghölzli の病院の宿舎を手配していただいて、1980年の冬学期に訪問することになった。

それまで哲学的、理論的傾向の強いドイツの精神病理学に親しんできたので、治療実践に根ざしたスイスの精神病理学はとて新鮮なものであった。以後、わたしの精神医学観は大袈裟に言えば一変させられた。

Scharfetter 教授についてはすでに紹介（「シャルフェッテル教授との出会い」, 臨床精神病理, 20:16-19, 1999）しているので、当時のスイス精神医学の個人的な体験について少し紹介してみたい。

激しく雪が降り続いていた、クリスマスを控えた、ある日の夕方、チューリッヒ市内の山手にあるユング研究所に連れていってもらった。「日本風の煉瓦作りの建物でしょう」と説明されたが、あちこちと出っ張っているところのある、やや異様な印象を受ける建物であった。当日は、心理療法家たちと患者さんたちが入り交じっての賑やかパーティが開かれていた。一見して自閉的な少女が一人で素っ頓狂な声を上げて叫んでいるかと思うと、その傍らでは犬を連れた老婦人が周囲の喧騒を無視するかのよう物思いに沈んでおり、そのような人たちが一杯いるあいだを上機嫌な若者が走り回っていた。なんとも奇妙ではあるが、愉快的な雰囲気に満たされていた。これがわたしとユング的なものとの最初の出会であった。この雰囲気は忘れがたいものであり、わたしたちの病棟での患者さんたちとのレクリエーション

の度に、よくこのことを思い出す。

それからこの研究所の地下の脳波検査室を見せてもらった。Jung の著書とともに、有名な分裂病の連想実験をした実験装置が保存されていた。Jung はこの装置を使って、患者に刺激語を提示すると連想語を思いつかなかったり、反応時間が遅れることがあり、これがコンプレックスに密接に関係していることを発見したのである。

ユング研究所に対する当時のブルクヘルツリの若手の精神科医たちの意見は好意的なものではなかった。そのスタッフが少なく規模が小さいこと、精神分析だと言いながら、その実、大量の安定剤を処方するために、「これでは精神分析ではなく、精神薬理学だ」と批判していた。精神療法と薬物療法の関係について、考えさせられるものである。

チューリッヒ市内の山手にある、かつてアインシュタインが勤務していたことでも有名な連邦理工科大学の近くにある、三階建ての現存在分析研究所にも連れていってもらった。すべて女性の心理療法家が神経症圏の症例発表をしていた。美しく化粧し着飾った女性が発表し、それを聞いている参加者も殆どがファッショナブルに着飾った女性たちであった。入り口のハンガーは豪華な毛皮のコートで溢れていた。二階の大きなカンファレンス室の壁一面に飾られている Heidegger の写真を前にして、愛情、憤怒などの転移現象、性愛、身体性、罪責、時間性、権威性などに議論が集中していた。

発表者を真ん中にして、司会者がまず喋り、次いで意見を求められた Condrau が神経質に絶えず視線を動かしながら、「Boss によれば…」と大きなジェスチャーでひときわ声を高めて、Boss の著作を引用して意見を述べる。Boss 教授が出席されていると、Condrau が自分の意見を述べたあとで、「Boss、どうぞ」と最後の意見を求める。Boss は普段は人懐っこく笑顔を見せているが、意見を求められると視線は厳しくなり、「Heidegger によれば…」と、Heidegger

の著作を引用して答える。その間、しばしば眼鏡の柄のところに口の端を持っていった。Condrau 自身にも現存在分析に関する多くの著書があるが、コメントをしている最中に、Boss から「それは誤解だ」と指摘されると、反論することはできない。

わたしのような部外者であっても、Boss の権威に圧倒される思いである。不十分な語学力ではすべてを理解することはできないが、それでも現存在分析についての基本的な概念についての質問が参加者から相次いで出されるのに驚いた。Boss は丁寧に返事をしていった。

現存在分析に対しても当時のブルクヘルツリの若手の精神科医たちの意見はさらに辛辣なものであった。その第一はブルジョア指向であり、金持ちの患者ばかりを診て、高い分析料金を取っているということ、それに参加者たちが理論的にも勉強していないこと、さらに彼らは臨床経験もなく、それでいて議論ばかりしているということであった。ブルクヘルツリの若手たちは研究所のことを「現存在分析—幼稚園！」と呼んで揶揄していた。

それまで Boss の多数の訳書に接し、日本で行われている哲学的な精神病理学的議論に馴染んでおり、期待を抱いていた者にとっては、いささかショックな体験であり、現地での批判であった。現存在分析が一つの役割を終えつつあることを実感した。この研究所はまもなく市内の別の場所に引っ越した。その後、Boss 教授も亡くなり、雑誌「現存在分析」も休刊になってしまった。



これに対して、子どもの精神科通院施設と子ども病院 Kinderspital の精神科病棟での体験は楽しいものであり、わが国の事情と比較して考えさせられるところが多かった。

子どもの精神科通院施設は閑静な住宅街の一角にあり、建物の外観も間取りも隣近所の一戸建ての住宅と何ら変わりはない。ただ“Tagesklinik für Kinder und Jugendpsychiatrie”という表札が掛かっているだけである。注意しなければ行き過ぎてし

まう。普通の住宅の居間に当たるところがプレイルームになっており、心理療法家に対応しており、盛んに絵を描かせたりしていた。勉強部屋に当たるところが、幼児を対象にした「幼稚園」と呼ばれ、あるいは大きな子どもを対象にした「学校」と呼ばれて、専任の教師が対応していた。最初、「幼稚園を見学しますか」と尋ねられて、「ここからどれくらい離れているのですか」と質問して大笑いになった。同じ家のなかの部屋の名称である。子どもたちに対する羨ましいやら、心憎いばかりの心遣いである。遊戯療法については、特に「台所」の利用が大事であると強調していた。全く同感である。数人の子どもたちが遊んでいた。「敬遠されたら、すぐに出てください」と言われていたが、みんなこちらに関心を示してくれて、うれしかった。

子ども病院での体験も同様であった。ここでも病棟の一部屋に「学校」という名札が掲げられており、専任の教師がいて、複式の授業が行われていた。入院期間は学校の関係で原則として一年単位になっていた。これだと安心して入院ができて、しかも留年するなどという心配は要らない。うらやましい制度である。ここではおやつを時間を一緒に過ごした。関心を示さなかったり、視線が合わない子どももいたが、小さな男の子がジュースのお代わりをしてくれたり、別の男の子が合気道を知っているからとその格好をしてくれたり、顔一面にサインペンで落書きをしている男の子が自分のポテトチップスをしきりに勧めてくれた。年長の女の子は「“Psychiatrie”は日本語でどのように書くのですか。どのように発音するのですか」と話しかけてきた。「精神科」と書いて発音すると、「おかしい」といって、大声で笑うので、一緒に笑った。帰りがけには、彼女は「サヨナラ」と挨拶してくれた。

日本の子どもたちの治療施設も、私たちの病院でもこのようにならないかと念願しているが、二十年を経ていまだに実現していない。そののみか、子どもたちの問題は年々深刻になるのに、治療環境は悪くなるばかりである。